

地域教育編成の今日的課題 — 社会移動と教育 —

池田 秀男 (広島大学)

1. 問題の限定

上記主題に対して、私は地域教育体系が今日どのように機能しているかを実証的に明らかにしながら、その機能的問題の解決すべき課題は何かという面から接近を試みたいと思う。

今日、学校教育は社会移動の唯一のルートではないけれども、主要なルートとなっている。これは産業社会の共通の特徴であるが、やがての産業社会における地位構造と学歴主義は教育全体に重大なインパクトを与え、その機能障害や機能不全を生み出している。子どもの遊びの喪失、「知育」偏重、授業からの落ちこぼれ、学校ごらい、教育の選抜性や差別性、塾や家庭教師の繁栄と家庭教育の破壊など、いわゆる進学競争体制の強化はその典型的表現である。これは基本的には学校教育を過度に社会移動の通路として特制化し手段化していることに起因している。そして今や学校教育は教育価値「付与」の機関としてよりも、教育「剥奪」の機関と化している面がある。

今日の日本の教育において、これほど重要かつ緊急の解決を迫られている課題はない。私は地域社会を産業社会の下位体系として位置づけ、地域社会における教育体系がいかに産業社会の社会移動のルートとして特制化されており、またそうすることによって地域教育が「システム」としてどのような機能的問題をかかえているかを明らかにしたいと思う。

2. 地域教育体系の枠組

地域教育体系を問題にする場合、一方では地域的枠組を確認し、他方では教育体系のどのレベルに議論を焦点化するかを限定しておく必要がある。前者については地域教育圏の発想が

可能である。これは学区や行政圏とも異なり、教育サービス・エリアのシステムとしての単位であり、したがってどのスコープとシーケンスの教育をシステムの下位単位として含めるかによって幅がりを変える。後者については、同じ地域教育システムといっても、その問題の性格や取り扱う視角によって、その焦点化されるべき教育レベルとパートは自ら異なる。そして社会移動のルートという視角から接近しようとする場合には、そのルートが体系として分化する高校教育のレベルに焦点化することが適切であろう。しかし高校教育は社会移動の教育ルートの1位相であって、かなりの数の生徒にとってはさらに次のレベルの位相を通して社会移動はもたらされている。このように見てくると、移動ルートの諸位相に含まれる選抜、訓練、配分、野心的規制などの過程を問題にする場合、地域社会の高校教育と大学教育の全体を含む教育体系を構想する必要がある。

さらに、地域教育体系を地域教育編成の課題という文脈で取り扱う場合、そのシステムに含まれる地域的要素とは何かを確認しておく必要がある。というのは、教育の社会的基盤として地域社会の生態学的、文化的、社会構造的な特性を視角に収めることは教育行為や行政の当然の要請であり、単にナショナルな課題を地域社会サイドから抱え直すというだけでは、地域社会主体とする地域教育編成の課題は必ずしも明確にならないからである。

ここでは以上の反省に立つて、地域の幅がりとして県を分析単位とし、そこにおける教育体系の高校教育レベルに焦点化して議論を進める。高校教育は義務教育のナショナルな枠の外であり、公立高校は直接県の教育政策と行政下にお

かれ、私立高校はそれとの補完的關係で管理運営されている。今日、各県教育の重要な政策課題として高校入試選抜の模範、高校教育課程の配置とバランス、高校間の格差や私学助成などが人々の関心を集めているが、実にこれらの社会移動ルートとしての高校教育レベルのメカニズムや制度的配置こそ、地域社会の小・中学校教育や家庭教育も含めて地域教育体系全体の機能的問題を全うさせる要因となっているのである。この問題を構造的に理解するためには、地域教育全体を一つのシステムとして把握し、各下位体系や部分ととのなかに位置づけて、それとが遂行している諸機能の関連を有機的に明らかにする必要がある。

3. 社会移動の教育ルートと地域的構造と機能
地域教育体系のなかで社会移動のルートとしての分化は、中学校卒業後における高校進学ルートと就職ルートの位相に見られる。しかし高校進学率が90%を超えた現在では、高校への入試選抜とそれを通しての各高校教育課程への配分およびここでの学習経験や訓練が社会移動の教育ルートを社会化させる主要なパイプとなっている。

「社会移動と教育」という関連では普通、高等教育卒の学歴と移動の関連が議論されるが、その学歴取得とその後のライフチャンスを決定する第一的動機は地域高校教育課程のどこに配分されるか（配分されない場合も含めて）によって決定される場合が多い。これは水平的および鉛直的の両移動において見られる現象がある。この個人の運命を決定する教育ルートはどのように構造化され、どのような機能を遂行しているのか。

ここでは、この問題をめぐって名目的と実質的の二重構造や地域社会の教育供給関係のアンバランス、構造に内在する *Warming-up* (加熱) と *Cooling-out* (冷却) の両機能面から検討を加え、地域教育体系が生徒の修学、学業不振、低気力、根気やエネルギー蓄積の希薄化、逸脱や非行などさいかに内在化させているかを明らかにする。これによって、地域教育体系の逆機能の構造的源泉とシステム再構成の課題を洗い出す。

4. 教育ルートのパターンと予期的社会化の帰結

高校教育レベルの多様な移動ルートは、社会移動の全位相のなかでどんな位置にあり、どんな帰結やインパクトを個人の社会化の上にもたらしているか。

3.では主として地域教育体系そのものの内部構造や下位体系の相互関連を問題とするのに対して、ここでは地域教育体系と社会体系との関連が、一方では出自と移動ルートとの因果関係面から、他方では移動ルートとその帰結との関係面から明らかにされる。前者は地域教育機能の構造や教育的選抜の原理、*Preschool Socialization* と *School Socialization* を結びつける間かれた社会体系としての学級課題を導き出す情報を提供し、後(者)は今日の高校教育がどんな社会的達成目標や価値観を内面化させ、移動に向けて四路づけていっているかを示す。

これらの分析は、地域社会および全体社会における高校教育の機能と同時に、その教育体系によって形成された(構造化された)現代青年の行動と心理の社会的教育的文脈の理解を深めるのに役立つであろう。